

第1部 エッセイ

テーマ「おばあちゃんの手料理とごはん」

一般の部

佳作

菜の花べんとう

東 尚子

月日のたつのは何と早いこと。私はいま八十七歳になった。ひと昔前の思い出である。

幼児期私は祖父母の許で暮らしていた。妹が年子で生まれたため、しばらく預けられたのである。祖父母といってもまだ現役の駅長さんで若くて無類の子供好きの人たちであったから誠に居心地の良い生活であったらしい。時を経ても父母の家へは戻りたがらず、祖父の転勤先へついてまわっていた。

ただ私は身体が弱く偏食と人見知りが強い子で、ずいぶん祖父母を悩ませたらしい。

それで当時はまだ通う子の少なかった幼稚園に入ることになった。地元でハイカラと言われている園だった。水兵さんのような帽子とまっ白で大きなエプロンが制服、先生たちも洋装でかっこいい写真が残ってる。

園では週に何日かおべんとうを持っていく日があった。先生は毎回おかずのグラフをつけていた。魚肉は赤、卵は黄、野菜は緑の円グラフ、食事のバランスをみていたらしい。料理が得意な祖母は、弁当作りを楽しみにしていたというのに、私の偏食はどうにもならなかった。弁当を開いたとき、いっせいに立ち上がるいろんな匂い、もうそれだけで胸がいっぱいになってしまう。祖母は仕方なく、私が確実に食べられる食材で作ってくれた。

弁当箱の底にうすくごはんを敷きつめ、その上にけずり立てのかつをぶしをひろげる。またうすくごはんを広げ、焼きのりを敷く。更にごはんをのせて、最後は甘い炒り卵をと。だから私の円グラフはいつもまっ黄であった。先生は「なお子ちゃん、菜の花べんとう」と名付けた。

朝起きるとカリカリとかつを削る音、焼きの

りのプリンとした香り、卵はやっぱり甘い香がする。私は安心して登園した。

戦後の食糧不足から私の偏食も直り、料理作りの面白さにも目覚め、今なお台所に立つ私だが、やっぱりおばあちゃんの菜の花弁当のおいしさは忘れられない。